

心のエンジンが
駆動する、
探究学習の
場面集。



A collection of inquiry
learning scenes
that drive the
engine of the mind.

Be Excited

— 取材後記 —

新たな価値は、若者が探せる

「おそれを持ちながら若者と接しています」

津和野会議で、高校生のファッションショーを監修した津村耕佑さんの言葉だ。

若者が見出した価値の良し悪しを、判断するのは難しい。

大人の自分の中にある「価値」が簡単に言葉にできるならば、

それはすでに古い価値かもしれない。

だから、おそれるのだ、と津村さんは言った。

大人は、誰かが「答え」を持っていると思いがちだ。

だが、「正しい答え」なんてない。

新たな価値を探す力は、若者のほうがずっと強い。

大人にできることは、創造性にふたをしようとする全てから、若者を守ることだ。

背中を押し、未知を進むための「道具」を授けることだ。

具体的には何ができるか。

「エンジン」が駆動したとき、そこにはどんな「伴走」があったのか。

この冊子に集められた場面たちが、きっとヒントになるはずです。

企画	原 周右、中村 伶詞、大野 公寛、田中 リエ	編集・デザイン	サイカイデザイン
取材	笹島 康仁 島根大学社会教育主事講習 受講生 —— 岩下 静華、大地本 由佳、齋ヶ原 祐司、白石 綾 長門 愛香、長谷川 夕起、原 周右、松藤 史紹 三浦 亜美、横山 弘毅、若林 詩織 (五十音順)	協力	(一財) 地域・教育魅力化プラットフォーム
		発行日	2023年3月
		発行元	島根大学教育学部



心が高鳴る瞬間。

探究の成功事例は真似できません。

同じ道をたどっても、

同じように生徒の心が駆動するかは分からないから。

私たち伴走者に出来るのは、

その場面で最善の関わりを模索すること。

本書は、生徒の心が動いた場面集です。

「こんな時、どうすれば？」に寄り添うヒントをお届けします。

INDEX

高校生の心のエンジンが駆動する場面集

1. 「心のエンジン」「心の伴走」とは	03
2. 特集1「埼玉県立大宮高等学校」	05
3. 特集2「島根県立津和野高等学校」	09
4. 20の場面集	13
5. 場面集「探究学習」	15
6. 場面集「進路指導」	33

心のエンジン

誰もが心に「エンジン」を持っている。
課題を見つけるエンジン、
誰かとつながるエンジン、
枠を飛び出していくエンジン…。
一度動き出すと、今までできなかったことができ、
会えなかった人にも会える。
自らエンジンをかけ、ギアを上げ、
大きかったはずの壁だって飛び越える。
エンジンの燃料はなんだろう？
着火のきっかけは？
劇的な場面でも小さな場面でも、
目を凝らすと、
駆動のチャンスが見えてくる。
耳を澄ますと、
駆動音が聞こえてくる。



THE ENGINE
OF THE MIND.

Driving the engine of the mind

心の伴走

エンジン駆動のために、周囲ができること…。
それは、寄り添い共に走ること。
背中を押すか、見守るか、あるいは、ぶつかるか。
その場面、互いの信頼関係で、
選択肢は変わってくる。
大事なのは”問い”だ。
「アクセルもブレーキも、ハンドルを握るのも自分たち」と
気づくための問い、
「自分たちの動きで、何かが変わる」と
実感するための問い、
気づきをさらに深めるための問い。
きっと、正解はなし。
共に迷いながら、悩みながら、
共に走り続けることが、
新しい未来へと繋がっていく。



Toward the future together while staying close to each other

ACCOMPANIMENT
OF THE HEART.



左から、津田琴巳さん、伊藤愛莉さん、鈴木優介さん。総合的な探究の時間の中で、「草加せんべい」の魅力を若者へと伝えるプロジェクトに取り組んでいる。

特集01 「梓」から飛び出すエンジンは？

埼玉県立大宮高校は2020年度から個人で設定した課題をテーマとする探究学習を導入した。問いを立て、フィールドワークを重ね、校内発表と個人論文執筆を目指す。今回取材したのは、ある名物が抱える課題に着目したチームだ。

「草加せんべい」に行列：きっかけは市役所訪問

2022年11月、大宮高校の食堂に行列ができた。生徒たちが買い求めたのは、草加市名物「草加せんべい」。

を、いかにしてアピールしていくかを話し合った。

準備した1千枚は、わずか4日間で完売した。

しかし、「議論だけでは実感が湧かなかった」と伊藤さんは振り返る。実際に「エンジン」が回りだしたのは、夏

その仕掛け人は、2年生の鈴木優介さん、伊藤愛莉さん、津田琴巳さん。3人が掲げた問いは、「どちらかというと年配者のイメージを持つ草加せんべいを、どうしたら若者に広められるか」。草加せんべいが持つ魅力

休みに市役所や企業を訪問したことがきっかけだった。地域には10社以上のせんべい業者があることを知り、食べ比べてみると、それぞれの個性や味わいに気づいた。市役所職員や職人たちとの対話

を重ね、各事業者の特色やこだわりを知った。知っていたはずの名物から、知らないことがたくさん見えてきた。「せんべいは奥が深い」と3人は口をそろえる。

同時に、お中元・お歳暮の減少で苦境にあることも知った。さまざまな立場の人と関わる度に、地域の課題に向き合っている実感が増してきたという。「僕たちに何かできないか」。そんな思いを感じていたところ、担当教員の後押しもあり、冒頭の校内販売会につながった。

迎えた販売会での反応は上々。「お年寄り」のイメージがあるせんべいに、高校生が列をつくった。自分たちが動かなければ、あり得なかった光景だ。「企業の方にも喜んでもらえてうれしかった」と津田さんは言う。販売会で得たアンケート結果を元に、さらなる魅力発信策をまとめ、年度末の最終発表を目指す。もちろん、短期間の成果は限られるが、後輩たちへの引き継ぎも視野に、未来を見据えた議論を重ねている。



12月、授業の中で販売会を振り返る3人。「せんべいには企業や職人のこだわりが詰まっている」と知ったといい、その魅力を若者に伝えるため、販売会で集めたアンケート結果から次の手を考えていた。



せんべいの袋には伊藤さんがデザインしたシールを貼り付けた。販売したせんべいは12種計1千枚。販売会には多くの生徒が詰めかけた。

3人の役割分担「チームワーク抜群」

伊藤さんはデザイン関係を、津田さんは学校や企業との調整を担い、「草加せんべい」企画の発案者である鈴木さんは販売会のレイアウトなどを担当した。「それぞれの役割がはっきりしていて、チームワークが抜群」と、担当教員の田中里奈さんは言う。



「枠」を決めがちな高校生。 エンジンをかけたのは「後押し」。



教員 田中里奈さん

2021年度に島根県立隠岐島前高校へ派遣となり、教科間のコラボレーションや探究学習の実践に浸かった。「毎日違うことばかり。楽しかった」と言う。母校でもある大宮高校で、探究学習を進めている。

「売ってみれば？」で押した背中。

総合的な探究の時間を担当する教員、田中里奈さんの一言が校内販売会のきっかけだった。3人は「授業での販売は考えもしなかった」と振り返るが、田中さんは「草加せんべいという分かりやすい商品がある。市の職員も事業者も協力的。『売ってみたらいいな』とシンプルに思いました」と話す。

ただ、同校では販売会の前例はなく、乗り越えるべきハードルは多かった。PCの操作に慣れている津田さんが中心となり、協力企業との交渉や学校側から求められる書類をこなして実現にこぎつけた。田中さんは1歩目を後押し

したが、それから走り切ったのは3人の力だ。「大宮高校の生徒は能力が高い。自分の枠を決めがち。もっと自由であってほしい」と田中さんは語る。2022年度はコロナの感染状況もやや落ち着き、総探も初めての本格活動だった。「とにかく外に出す」を同じ学群を担当する3人の教員の共通認識にして授業にあたったという。

「『いいよ、やりなよ』と背中を押すことが重要です」と話すのは、田中さんとチームを組む同僚の羽鳥友希恵さん。実際、夏休み中のフィールドワークが、枠を飛び出すきっかけになったと感じ



ているという。

「草加のチームも、市役所を訪ねてみたら職員が予想以上に乗り気で、そこからプロジェクトが回り始めました。動いてみれば何かを得られる。それがきっかけで羽ばたく生徒はいる。総探は、その機会を全校生徒に広げるきっかけになっていると思います」

まちへ出るときさまざまな関係が生まれ、一人ひとりの「問い」は個性豊かなプロジェクトへ発展した。枠を飛び出した生徒たちは、自信が顔に現れた。

田中さんは言う。

「販売会、フィールドワークの経験を生かし、どう最終発表に結びつけるか。クロージングへの伴走が鍵。大事なのはこれからです」

田中さんが意識した伴走のポイント

自分も「面白い！」と思うことを提案する。

学校以外の大人と関わる機会を後押しする。

生徒の声 Student Voice



直前のピンチ乗り越え

鈴木優介さん

販売会の直前、津田さんが部活動の大会前で動けず、伊藤さんのクラスが学級閉鎖になりました。販売会は規模も大きく、関係者も多い。「失敗するわけにはいかない」と頑張りました。パソコンでのソフト表づくりや会計準備など、苦手な作業も多かったですが、不安なところは田中先生にアドバイスをもらって改善ができました。僕らが考えたことを企業の担当者に参考にしていただけたら頑張った甲斐があります。

埼玉県立 大宮高等学校

さいたま市にある県を代表する公立の進学校。全校生徒は約1千人。普通科と理数科がある。通称は大高（おおこう）。「勉強と部活動等の両立の実践と自主自律の精神の涵養により、高い志と強い使命感を持った未来を創るトップリーダーを育てる学校」を掲げている。





生徒8人がファッションショーに挑戦した。写真は松延悠さんの服。地域のシンボルである「サギ」と「コイ」を、「着物」の形にデザインした。カラフルな帯は「コイの鱗」。CDを組み合わせて表現した

特集02 「学びを深める」問いとは？

島根県立津和野高校は総合的な探究の時間を「T・P・L・A・N」と名付けて取り組んでいる。2022年度も多様なテーマがある中、ファッションショーに挑戦した生徒たちがいた。服作りを通して地域を「見る」「見せる」、同校初の試みだ。

「津和野」を纏う… 服作りで地域を「見る」と

2022年12月、かつて藩校だった歴史ある場所「養老館」で、生徒たちがファッションショーを行った。テーマは「津和野を纏う」。それぞれの生徒が見た「津和野」を、服のかたちにした。音楽がかかり、照明がたかれる中、黒のカーペット上をモデルが一人ずつ歩く。個性豊かな服たちの登場に、会場はわいた。

「服の完成は昨日でした」と、ショーを終えた松延悠さんは言う。

本番の日が近づくにつれ「ギア」が上がったといい、石見神楽の衣装の端切れから作った髪飾りも直前に作り上げた。

神奈川県出身。「地域みらい留学365」で、2年生の1年間で津和野で過ごすことにした。服作りでは、習ってきた日本舞踊で慣れ親しんだ「着物」をベースに、津和野のシンボルである「サギ」と「コイ」をデザインした。

「コイは水路にのるけれど、サギはまちの奥でよく見かける。『津和野のちよつと奥の深い』とも知ってほし」と考えました」

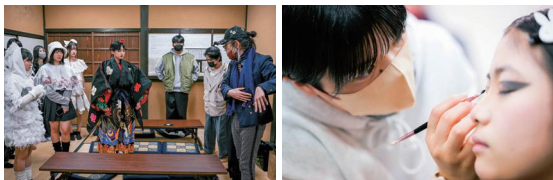
「ファッション」をテーマに集まった生徒は8人。最初の授業でファッションショーを見て、すぐに「ランウェイをやらう」と決まったという。

デザインの構想段階では和紙職人や石見神楽の大人たちと出会い、美術館にも出かけ、設計を何度も練り直した。同校の魅力化コーディネーター、玉木愛実さんは「『地域の課題を探す』ではなく、制作過程でさまざまな出会いや発見があり、自然な形で地域の課題に触れることができた」と話す。

「『津和野を自分の視点から見る』ことができ」と話した生徒もいました。プロジェクトを通して、自分とまちの関わりを思考し続けた。このことは、『自分と社会とのつながり』を考えるとにも広がって行くと思えます」



最後はデザイナーがモデルと一緒に歩いた。養老館は津和野藩主が1786年に創設した。会場となった「土間」は武道場として修業を行っていたという。ショーは国際地域会議「津和野会議」の一環として行われた。



ランウェイの直前、最後のアドバイスをメイクやDJとして裏方でファッションショーを支えたメンバーもいた（右端）

「見る」と気づく

服作りには「見る」が欠かせない。地域を見る、素材を見る、人を見る。プロジェクトを監督した津村さんは「最近、スマホばかりを見て、人を見なくなっている。でも、なぜこの人はこの格好なんだろう。と見始めるといろいろなことに気づいていく。『見る』をもう回復させることが大事」と話していた。



「あなたにとっての津和野って？」 学びを深める問いと 問うための「信頼関係」



玉木愛実さん

津和野高校の高校魅力化コーディネーター。東京都出身。ファッション雑誌の編集者として働き、2017年に津和野町へ移住。学校や地域の学びと創造を支える環境づくりを目指し、活動中。津和野まちどぶなか創造センター代表。

「あなたにとっての津和野って何？」

津和野高校で魅力化コーディネーターを務める玉木愛実さんは、生徒たちが最初に作ってきたデザイン画を見て、しばらく経った後で、ある生徒にこう問いかけたという。そのデザインは、津和野の「観光名物」があしらわれたものだった。

「県外から来た子が城下町やコイをモチーフに選ぶのは分かる。ですが、観光名所である城下町周辺以外の地域に住む子も観光客の目に映るものを選んでいて、『外からの視点』でまちを捉えていることが不思議でした。でも、本当は違うところを見ているはずなんです」

だが、すぐには指摘しなかった。「当時はまだ『1対複数』の関係性。『1対1』の関係性が築けていませんでした。そのため、ふとした時の立ち話を重ねつつ、『1対1』で話す場を設けていきました」と玉木さんは振り返る。

ファッション雑誌や書籍を片側に置き、「ファッションって自由だね」「これを何で表現しているんだろうね」と問いかけた。「壁打ち」を繰り返すうち、「私の津和野はやっぱりこれ」と思いを強くする生徒がいれば、「私にとっての津和野は自分の家の周りの風景」とモチーフを変えた生徒もいたという。



大切にしているのは「決めつけないこと」だ。「私たちは『教える一教わる』の関係ではありません。だから、決めつけるようなことは言いません。私はいこう思う。で、あなたは？』と」

生徒たちのエンジンがかかったのは制作が始まってから、という実感がある。「そこからはもう個人の世界。自分が動かないと進まず、動かざるを得ない状況になりました。でも、本格的な制作に入るまでに信頼関係を築けた。『あれがない、これがない』見てください』と気軽に言ってくれた。相談しやすい関係をつくることができたと思います」

玉木さんが意識した伴走のポイント

「1対1」の信頼関係を築く。

決めつけない。「私はいこう思う」で伝える。

生徒の声 Student Voice



助言であえて「シンプル」に

佐伯 起彦さん

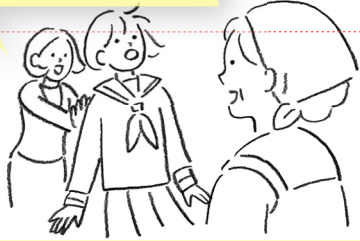
まず最初に、津村さんの存在でエンジンがかかりました。有名な方が携わってくれる、と。次は自分で服をデザインしてから。作る段階でもさらに「かかった」と思います。玉木さんは先生とも高校生とも違う、離れつつも近い存在。叱ってくれて力が入ったときもありました。デザインは最初は派手でしたが、「もっと津和野を表現できるよね」と玉木さんに言われ、考えていくうちにシンプルなほうで伝えられることもあったと考え、最終的なデザインが決まりました。

島根県立 津和野高等学校

「『やってみよう』『やってみる』にする学校」を掲げる津和野高校には、町内や近隣地域に加え、「地域みらい留学」で全国各地から多様な生徒たちが集まる。全校生徒は約200人。



どんな伴走をしたのか?



自分の気持ちと向き合うところからスタート

興味関心の範囲が広いなら、強引にテーマを絞るより、「困っている人を助けた」という気持ちを基に、すでに地域で取り組まれている活動に、自分がどう関わるのかを考えることを探究のきっかけとした。大人との対話や振り返りから、「自分を持つこと」で活動が広がることに気づききっかけづくりを心がけた。

どんな状況だったか?

EXAMPLE

High School Arc

場面集
01

探究学習

何をしたらいいか、
分からない

鳥根県立吉賀高等学校

15

場面集1「探究学習」 Example

伴走のコツを一言で

「とりあえず」を、もう一押し

伴走のコツ

生徒の声
Student Voice

誰かを助けたい想いと自分の気持ちを大事に

「とりあえず、ジビエの商品開発をしている人を助けよう」と思っていたが、商品開発や起業をしている大人との対話から、「楽しい」「やりたい」自分の気持ちがないと誰にも届かないのでは」と言われ、自分のコダワリを再考できた。

鳥根県立吉賀高等学校 生徒 S.Nさん

高校生の声

うに感じました。

伴走者の声
Companion Voice

吉賀町役場総務課吉賀高校支援室
高校魅力化コーディネーター
岩下 静華

伴走者のやりがい・心の駆動

20の 場面集

Example

A collection of inquiry learning scenes that drive the engine of the mind.

全国の高校で、生徒達に寄り添う伴走者達の現場の声を、場面集として20箇所紹介します。それぞれの地域によって様々なハードルがありますが、創意工夫しながらその問題に向き合っています。ハードルを超えた先に生徒達の心に火が灯る瞬間、それは生徒だけではなく、地域の人々や伴走者達の心にも新たなエンジンの鼓動が聞こえてきます。



地域問題を探究学習として取り組む

チームのメンバーの意見に乗っかる形で探究学習に取り組み始めたが、本気になれず、言われたことを授業時間内だけはこなす生徒。中間発表後に、何か変わるきっかけになればと、普段からそのテーマに関わっている地域の方との交流の場の設定を提案した。

EXAMPLE

High School Arc

場面集

02

探究学習

何となく動き出したが、
本気になれていない

島根県立
平田高等学校

地域の人との接点をつくる

伴走のコツ

生徒の声
Student Voice

地域の人に直接言われた「ありがとう」の言葉

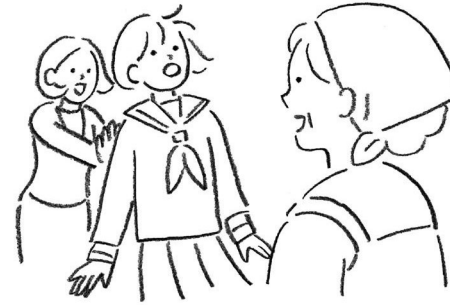
地域の人に「このテーマを選んでくれてありがとう」と言われて、自分たちがやっている活動は意味があるんだと思えました。その後は、放課後に学校で作業することも苦ではなくなったし、自分にできることを頑張りたいと思うようになりました。

島根県立平田高等学校 生徒 A.Hさん

地域の方からの一言で顔色が変わったのは明らかでした。伴走のやりがいは、生徒の変化や成長の瞬間に立ち会えることだと実感しました。また、地域の方の言葉が生徒を一番変化させるという点も面白いです。私としては色々考えながら準備をして伴走しているのにもかかわらず、生徒の心に一番残るのは地域の方の何気ない一言。生徒の成長ポイントが自分の手の届かないところ、予定調和を崩したところにあるという点だが、伴走の醍醐味であり、大切な視点だと感じています。

伴走者の声
Companions Voice

島根県教育庁教育委員会
高大連携推進員
長門 愛香



自分の気持ちと向き合うところからスタート

興味関心の範囲が広いなら、強引にテーマを絞るより、「困っている人を助けたい」という気持ちを基に、すでに地域で取り組まれている活動に、自分がどう関わるのかを考えることを探究のきっかけとした。大人との対話や振り返りから、「自分軸をもつこと」で活動が広がることに気づききっかけづくりを心がけた。

EXAMPLE

High School Arc

場面集

01

探究学習

何をしたらいいか、
分からない

島根県立
吉賀高等学校

「とりあえず」を、もう一押し

伴走のコツ

生徒の声
Student Voice

誰かを助けたい想いと自分の気持ちを大事に

「とりあえず、ジビエの商品開発をしている人を助けよう」と思っていたが、商品開発や起業をしている大人との対話から、「楽しい」「やりたい」自分の気持ちがないと誰にも届かないのでは」と言われ、自分のコダワリを再考できた。

島根県立吉賀高等学校 生徒 S.Nさん

好奇心があるからこそ優柔不断になったり、一度決めたら変えられないと、足踏みする生徒を一押しすることで、挑戦に繋がれたらと思っていました。「とりあえず何かをする」ことで、好きだけではなく、違和感から何かを選択をできることもあると感じました。また、地域の大人から「他者のためだけではなく、自分の気持ちに乗せることが原動力として大切だ」と言われたとき、生徒が自分の大切にしたいことが見えてきたように感じました。

伴走者の声
Companions Voice

吉賀町役場総務課吉賀高校支援室
高校魅力化コーディネーター
岩下 静華



震災をテーマとした震災伝承に取り組む

震災伝承の語り部をしていて、震災をテーマに探究を始めたが伝え方や進め方に悩んでいた。言葉だけが表現する方法ではないことを伝え、少し揺さぶってみたところ、最終的に白い紙1枚を使ってそれぞれの震災を表現し、伝えていく方法を考えた。

EXAMPLE

High School Arc

場面集

04

探究学習

宮城県立
気仙沼高等学校

動きだしているが、
すぐに行き詰まる

ちょっと変だけど、面白そうな選択肢を増やす

伴走者のコツ

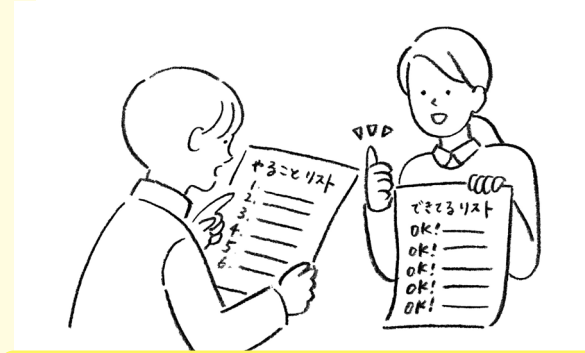
生徒の声
Student Voice

新たな世界が開いた

コーディネーターの皆さんはいつも楽しそう。自分には持っていない考えを与えてくれて、新しい世界を教えてくれる。だから私もやってみたいと思えるし、躊躇することがなくなった。

宮城県立気仙沼高等学校 生徒 K.Iさん

「そこまでやっていいんだ」「なんだか楽しそう」という考えが生まれた瞬間、高校生への不安やためらいがなくなります。多様な選択肢の中から自らの意志で選んでいくことで、前のめりに活動するだけでなく、俯瞰して考える力も備わっていきまします。私自身も高校時代の探究活動の経験を経て、今の職に就きました。当時の出会いと経験が、将来に繋がる可能性が大いにあります。どんな未来が待っているか、楽しみで仕方ありません。

伴走者の声
Companions Voice一般社団法人まるオフィス
三浦 亜美

イベント企画をチーム探究として取り組む

生徒たちの頭の中だけで理想像を描くのではなく、イメージを具体的な言葉にすること、必要なことを逆算して動くこと、準備と試行を並行して行うこと、やらなければならないリストや出来ていることリストの洗い出しなど問いかけながら一緒に確認することを繰り返した。

EXAMPLE

High School Arc

場面集

03

探究学習

島根県立
吉賀高等学校

チームとして
機能していない、
うまくいっていない

生徒自身が気付くための『問いかけ』

伴走者のコツ

生徒の声
Student Voice

チームでも誰か行動しなければ始まらない

個人探究の心配や怖さから、チーム探究を選択したが、意見の多様性と集約・役割分担・計画性・指示系統などの課題が見えた。事前に計画を立て、失敗のシミュレーションまですること、人に頼りすぎず自分から行動すること、また、互いの「やりたい」気持ちをメンバー間で共有することが齟齬を減らすために必要だと知った。

島根県立吉賀高等学校 生徒 R.Mさん/S.Aさん/R.Fさん/M.Oさん

何かしなきゃという気持ちから、何をしたら良いのか？を知らうとする姿勢が生徒からでてきました。伴走者がリーダーになるのではなく、生徒自身が考え、行動に移せるように「自分たちに出来るようなこと」そのために必要なこと」を問いかけて言葉にすることを何度も重ねました。高校生にとって、地域の大人を頼るのは決して楽をすることではありません。巻き込む難しさを感じながらも、大人と一緒にイベントをしたからこそ、振り返りの様子から生徒の成長を感じました。

伴走者の声
Companions Voice吉賀町役場総務課吉賀高校支援室
高校魅力化コーディネーター
岩下 静華



観光列車のおもてなしイベントを企画

啓発ポスターを作ろうと思う、と相談にきたが、そもそも何をしたいかから洗い出し直し、他地域の成功事例と一緒に調べた。高梁駅でJRと連携し鉄道イベントを開催している担当者を紹介したところ自分で話を聞きにいき、観光列車のおもてなしイベントの企画から運営、司会進行まで全て自分でやった。

EXAMPLE

High School Arc

場面集

06

探究学習

動きだしているが、
すぐに行き詰まる

岡山県立 高梁高等学校



蜜蝋(ミツロウ)を作ろうと奮闘

蜜蝋を作りたいけれど、蜂の巣が手に入らず困っていた。まずは、養蜂をしている知り合いを紹介し、一緒に貰いに行った。それだけでは蜂の巣が足りなかったので、直売センターで売っている地元産の蜂蜜のラベルの連絡先に問い合わせる方法を教えた。その後、自分たちでアボを獲り、無事に必要な蜂の巣を手に入れることができた。

EXAMPLE

High School Arc

場面集

05

探究学習

動きだしているが、
すぐに行き詰まる

岡山県立 高梁城南高等学校

「できそう」より「何をやりたいか」を問い直す

伴走のコツ

生徒の声
Student Voice

最初の企画のままなら、意味がなかった

ポスター企画のままなら、狭い範囲の人にしか伝わらずあまり意味がなかった。観光列車のおもてなし企画を通じて、イベントの大変さだけでなく、JRや図書館など知らない大人との関わり方も学べた。公の場でプレゼンする経験も初めてできて良かった。

岡山県立高梁高等学校 生徒 K.Mさん

とにかく電車が好きで、電車を利用する人・好きな人を増やしたい、という生徒でした。人前で話すのが得意ではない(と先生も皆も思っていた)彼が、鉄道への愛を原動力に、駅のホームで観光おもてなしのプレゼンをする姿と姿容に驚かされました。期間内にできそうなこと、形になりやすいようなこと、なく、できるできないは別に「心からやりたいことは何か」を探ってあげる大切さを学びました。

伴走者の声
Companions Voice

岡山県高梁市
学校連携コーディネーター
横山 弘毅

魚と一緒に釣った後、釣り方を教えて見守る

伴走のコツ

生徒の声
Student Voice

見通しが甘く、焦っていた

地域で養蜂している人に蜂の巣をもらえたらいいなと思っていたが、当てがあったわけではなく、見つからずかなり焦っていた。蜂の巣がたくさん手に入ると心にも余裕ができた。

岡山県立高梁城南高等学校 生徒 R.Sさん他

インターネットで調べても出てこないようなローカルな情報をどう得るか、地域の面白い人にどうたどりつくか。智恵の絞りどころであり、伴走する大人の力量が問われる場面であり、地域と連携する学びの面白さでもあると思います。そのとき、「ヒントは出して、見守る(後押し)する」ことで、生徒が「自分たちでやり遂げた感」も得て自信に繋がりと、さらなる行動加速にも繋がると思っています。

伴走者の声
Companions Voice

岡山県高梁市
学校連携コーディネーター
横山 弘毅



スポーツで高校生のつながりを創りたい

効果測定の難しいテーマで探究する際、大人や組織を巻き込むための必要条件に生徒が気づくには、実際に大人へ説明させたり、問われる経験が必要だと思い、学校内外の人に頼んだ。一方で、生徒の「やりたい」気持ちを大切にするために、やり直しを迫られた時には、一緒に状況を整理して次の一手を考えるように心がけた。

EXAMPLE

High School Arc

場面集

08

探究学習

島根県立
吉賀高等学校

やり直しを迫られて
気持ちが萎えている

EXAMPLE

High School Arc

場面集

07

探究学習

岡山県立
高梁高等学校

動きだしているが、
すぐに行き詰まる



発達障害のこども向け教材を開発

「発達障害のこども向けの教材をつくりたい」けれど、どこに話を聞きに行けばいいか最初の一步がわからなかった。市教育委員会の専門家の先生と、発達障害の子を持つ保護者の両方を紹介し、オンラインでインタビューを行い、それぞれの立場の声を聞く場をつくった。

一緒に状況と情報を整理する

伴走のコツ

生徒の声
Student Voice

やり直しは成功への材料だ

他校の友だちを作りたいと思い企画を練っていた。特定の学校の生徒を対象とした活動について、学校の合意を得るには、勢いや感覚的なものではなく、目的や仮説・依頼内容を相手に分かりやすい言葉でまとめた企画書などが必要だと学んだ。

島根県立吉賀高等学校 生徒 K.Mさん

どうせやるなら好きなテーマで探究したいと、生徒は「やりたくないこと」発信で始めましたが、ニーズ調査や目的や仮説立てなど、言葉にするのに生徒は苦慮していました。伴走する中でも「きつ」と良いだろうという生徒の感覚的なものに対し、仮説や効果測定を立てることを促す問いかけに難しさを感じました。しかし、生徒自身が「楽しそう」と思うテーマだからこそ、何度やり直しになっても頑張る姿を私は応援したいと思います。

伴走者の声
Companions Voice

吉賀町役場総務課吉賀高校支援室
高校魅力化コーディネーター
岩下 静華

「多面的な視点」を持てるように地域と繋ぐ

伴走のコツ

生徒の声
Student Voice

もしも、両方の話を聞いていなかったら…

専門家の先生と親御さんとで全く違う視点からの声が聞けた。特に、発達障害の子を持つ親御さんの話を聞いていなければ、制作した教材の工夫点なども大きく変わっていた。当事者の生の声を聞くこと、複数の意見を聞き多様な視点を得ることの大事さを学んだ。

岡山県立高梁高等学校 生徒 Mさん

「ネットで調べているけど、それ以上どうしたらいいかわからない」というチームへの伴走で、あえて市教育委員会と当事者である親御さんの双方にインタビューするよう提案しました。ある課題があったとき、立場が異なると見え方も全く違うし、言い分も変わるといことは世の中よくあることなので、大事な気づきを得られて良かったと思います。

伴走者の声
Companions Voice

岡山県高梁市
学校連携コーディネーター
横山 弘毅



岩ガキの殻をチョークに再生して地域貢献

技術的ハードルの高さから期限内にゴール達成が危ぶまれる状況。これまでのチームプロジェクトを一旦停止して他テーマに移るか、試行錯誤を続けるかの相談を受けた。ゴールレベルを適切に下方修正しつつ、その内容への価値づけをし背中を押した。

EXAMPLE

High School Arc

場面集

10

探究学習

▼ゴール設定から見直し

島根県立
隠岐島前高等学校

伴走者は本質的価値を見失わない

伴走のコツ

生徒の声
Student Voice

ゴールイメージにとらわれず、自分たちの活動の価値を再確認できた

このままでは、地域で実践し成功するというゴールに辿り着けないと焦りがありました。活動テーマの変更も考えたが相談して、「計画通りいくことが探究のゴールじゃない」という言葉で気が楽になりました。自分たちのプロジェクトはゼロから1を創り出す活動であると再確認し、自信を持ち直しました。後輩たちがプロジェクトを継承して2以上を創ってくれると嬉しいです。

島根県立隠岐島前高等学校 生徒 K.Sさん/N.Rさん/H.Mさん/K.Mさん

伴走者の声
Companions Voice一般財団法人
島前ふるさと魅力化財団
原 周 右

生徒が社会インパクトという成果を志して取り組んでくれたことは素直に嬉しく、応援したい気持ちになりました。一方で、限られた時間や技術的限界を生徒が理解した時にゴール・目標を適切に“下方修正”することも伴走の一部だと思います。この時に新しいゴールとこれまでのプロセスに価値づけすることで、生徒は引き続き意欲的にプロジェクトに取り組めると思います。

EXAMPLE

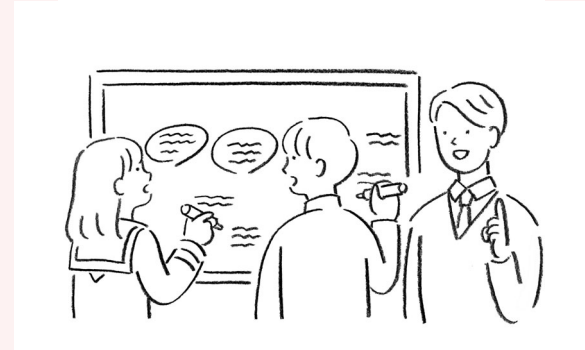
High School Arc

場面集

9

放課後及び授業外

▼ゴール設定から見直し

島根県立
江津高等学校

江津市発展のため、石見神楽プロジェクトを企画

プロジェクトを進めていく中でゴールがわからなくなっていた。生徒たちにヒアリングしながら、思いや、取り組んできたこと等をホワイトボードに書き出し、繋がり等を見ていったことで、ゴールや、これからどう取り組んでいきたいかが明確になっていった。

生徒の頭の中を整理し、可視化する

伴走のコツ

生徒の声
Student Voice

モヤモヤが晴れた

途中でプロジェクト(石見神楽)と、ゴール(江津市の発展)が結びついていないと感じていた。気持ちや考えを整理することで、石見神楽と江津市の問題解決のつながりがわかり、より一層石見神楽が好きになった。

島根県立江津高等学校 生徒 G.Mさん/Y.Oさん

伴走者の声
Companions Voice高校魅力化コーディネーター
齋ヶ原 祐司

ゴールの整理と合わせて、生徒の成長の様子も可視化したことで、目の輝きが変わったのが印象的でした。以前は人前に出ることや自分の意見を主張することを躊躇していた生徒でしたが、成長の様子を可視化した際に、「今まで人の目ばかり気にしていたけど、自分に自信を持つことができるようになった。」との声が出て、翌年の体育祭では、応援団、長を買って出るといって、生徒の変化に近くで立ち会えることがやりがいです。



大勢の前で活動を発表する

人前だと緊張して話すことができない生徒。活動発表を前に、ずっと「話せない」と言っていたので、個別に練習時間を取った。最初は沈黙が続いたが、じっと待ち「ゆっくりでいいよ」「誰もあなたを否定しないから大丈夫」と声をかけたことで勇気を出して話してくれた。それをきっかけに本人は自信が付き、当日は上手に発表ができた。

EXAMPLE

High School Arc

場面集

12

探究学習

うまくいっている感覚、
やりがいを感じ始めている

岩手県立 住田高等学校

生徒の声
Student Voice

「できた!」の感覚を持てるまで肯定し続ける

伴走のコツ

勇気を出して一歩踏み出したら、苦手を克服できた

私は、人前に立つとなかなか声が出ません。発表の時は、その場から逃げ出したいになりましたが、練習を思い出したり、人を好きな物に例えたりして乗り切りました。今では、その時の課題を克服して、自信を持ってはっきりとした声で発表できるようになりました。

岩手県立住田高等学校 生徒 S.Nさん

伴走者の声
Companions Voice

若林 詩織

住田町教育委員会教育コーディネーター
(現・軽井沢町学習センタースタッフ)

人前で話す怖さを克服するというのは簡単ではないと思いますが、本人の中に「この状況を変えたい」という気持ちがあったからこそ乗り越えられたと思います。人が変わる瞬間に立ち会うことができ、人はこんなに変わるんだと実感しました。探究の進度はまだまだスタート地点かもしれませんが、安心安全な場で、自分のことや関心を周りに伝えるというプロセスは彼女にとって大事な一歩だったと思います。この経験を糧に、探究を加速させて欲しいです。



地域の防犯に関する課題に取り組む

地域の課題を一緒に解決したいという話が地域からあった。関心のあった生徒が参加を申し出た。課題を解決したいと考える仲間との出会い、仲間の思い、本気の大人たちとの出会いが、背中を確実に押していく。

EXAMPLE

High School Arc

場面集

11

放課後及び授業外

チーム内でルールが見えてきて、自分の意志表示が出てきた

福岡県立 小倉商業高等学校

生徒の声
Student Voice

思いを同じくする仲間との協働

伴走のコツ

本気の大人たちの姿を見て、気が付いたら仲間と一緒に取り組んでる自分がいた

はじめは誰も参加しないので迷ったが、以前から気になっていたテーマなので思い切って一歩踏み出してみた。取り組んだことで見える景色があること、自分ごととして考えることの意味を学んだ。

福岡県立小倉商業高等学校 生徒 F.Rさん/K.Aさん/T.Nさん/M.Sさん

伴走者の声
Companions Voice

松藤 史紹

福岡県立小倉商業高等学校
進路指導主事 主幹教諭

地域の課題で防犯に関心のある生徒たちが地域の警察署で二セ電話詐欺の状況について学び、想定を大きく上回る被害を知り、顔色が変わりました。「他人ごとから自分ごとへ」切り替わる瞬間でした。市民センターでの発表に向けて、生徒たちが役割分担をしながら協働し、放課後も遅くまで取り組む姿が見られました。後日、学年主任の先生に学年集会で発表をさせてほしいと申し出て、実現させた行動力にチームの成長を感じました。



地域の防災意識を高めるために

生徒の興味関心とマッチするような地域のひと・もの・こと、学び場の情報を選択肢として提示したり、「やりたい」を具体的に「やってみる」ための機会とつなぎ、実践に向け外部との連絡調整のサポートをした。

EXAMPLE

High School Arc

場面集

14

放課後及び授業外

島根県立
浜田高等学校

現状把握、
未来思考ができ
本気で動き出している

興味関心とマッチング

伴走のコツ

生徒の声
Student Voice

やりたいことは決まったけど、自分だけじゃどうにもならない!

地域の人の実際の声を聞いたり、実践を積んでみたいが、自分の繋がりだけでは難しい。コーディネーターさんに人や機会をつないでもらえたことで体験的な学びや新しい視点・考え方、課題などが見つかかり、プロジェクトの深さや幅が広がった。

島根県立浜田高等学校 生徒 A.Tさん

実践の場は、本人が全く知らない環境よりは一番身近な地域が心理的ハードルが低いと考え、彼女が住んでいる地域のまちづくり委員会や、母校の小学校などをベースにしました。伴走者として、地域にある多様なつながりを活かして、生徒のニーズに応じて具体的にマッチングすることができていることが強みだと感じています。また、いきなり大きな実践ではなく、スモールステップでまづ「やってみる」ことで自信がつき、次の動きにつながっていきと考えています。

伴走者の声
Companions Voice

浜田市教育委員会
魅力化コーディネーター
大地本 由佳



「ゴミ分別ゲーム」の企画・開催に挑戦

イベントの内容ばかり考えていて、肝心の「いつやるのか」、「どこでやるのか」に対して向き合おうとしなかった生徒。「中身も大事だけど、日程と場所を決めないと時間がなくなるよ。」と何度もそれらを定めることの重要性を伝えつつ、本人の意識が向くまで辛抱強く待った。

EXAMPLE

High School Arc

場面集

13

探究学習

滋賀県立
安曇川高等学校

うまくいっている感覚、
やりがいを感じ始めている

見守りつつ、必要であろうことはしつこく伝える

伴走のコツ

生徒の声
Student Voice

「苦手」に向き合うことで、これまでの自分の殻を破ることができた

自分で何かを計画し、実行することがとにかく苦手だった。そんな中、実際にイベント開催をやり遂げることができた。この活動をとおして、「自分でなにかをやっていきたい」という気持ちが芽生えるようになった。

滋賀県立安曇川高等学校 生徒 M.Mさん

生徒自身がプロジェクトを考える前から「今の自分ではいけない。もっと積極的に色々な人と関われる自分になりたい。」と問題意識を明確に持つていて、克服したいとの思いがありました。さらに、挫けそうになった時には、伴走者の教員だけでなく、クラスメイト、他の教員、役員職員や地域の住民から応援をもらえる環境にあったことも本人のやる気の火が消えずに、やり遂げる後押しになっていたようにみえました。

伴走者の声
Companions Voice

株式会社Prima Pinguino
プロジェクトマネージャー
長谷川 夕起



様々な行事・イベント活動から学ぶ気づき

高校入学をきっかけに、様々な行事やイベントに積極的に活動するようになった生徒。活動を通して、気づきや感想を言語化したり、まとめることに苦戦していた。なので、まとまりきらない言葉を一度出してもらい、一緒に要約したり、ロジックツリーやマインドマップなどの図を用いたりして整理をした。

EXAMPLE

High School Arc

場面集

16

放課後及び授業外

長野県軽井沢高等学校

うまくいなか
何とかしようと
考え始めている
でも

生徒の声
Student Voice

言葉を引き出しながら、思考の整理を手伝う

伴走者のコツ

自分の考えを周りに話すことで頭が整理された。周りに話すと、さらにワクワクしてくる
今までは自分で考えているだけで誰かに話すことはなかったので、何も始まりませんでした。ですが、活動をきっかけに周りの人に話してみたら、頭が整理されてたくさん話したくなりました。今は、どう話せば伝わるかを考えています。

長野県軽井沢高等学校 生徒 A.Sさん

伴走者の声
Companions Voice軽井沢町学習センター
スタッフ

若林 詩織

本人がとにかく楽しそうで、人と交流するたびワクワクしているのが伝わるのでこちらも応援したくなりました。高校生になってから様々なことに挑戦するようになったので、慣れないことも多く自分の意見をまとめるのに苦戦しているが、本人のペースでゆっくりじっくり成長します。二歩踏み出したことで、「もつと伝わるように話したい!」という新たな意欲が生まれ、良い学びが生まれていると感じています。

EXAMPLE

High School Arc

場面集

15

探究学習

滋賀県立安曇川高等学校

現状把握、
未来思考ができ
本気で動き出している



新しい商品開発に取り組む

「自分の味を追求する」を実現するために、商品開発の試作の上で、必要なものを揃えた。また、協力してもらえる企業の候補と一緒に考えたり、試作品を企業に届けたりして、活動するにあたって後押しになるような環境づくりを行った。

生徒の声
Student Voice

一歩を踏み出しやすくする環境づくり

伴走者のコツ

「巻き込む力」は、自分の「こうしたい!」の想いとそれに対する懸命な行動で発揮されていく
今回の活動は自分一人だけの力ではできなくて、友人、先生や企業の方など多くの人達の協力のおかげでできた。自分の想いを伝えること、それに向けて日々頑張ることが、人を巻き込む力を高めることにもつながると学んだ。

滋賀県立安曇川高等学校 生徒 S.Kさん

伴走者の声
Companions Voice株式会社Prima Pinguino
プロジェクトマネージャー

長谷川 夕起

生徒自身が「決めたことは最後までやる」という姿勢と、悔しさをばねに出来る力を持つていたことが良かったです。何回も試作を行い、良いも悪いも周りの反応を得られたことも本人にとって原動力になっていたように思います。また、周りの大人も、厳しい言葉をかけつつも、「実現するためにはどうすればいいか」を前提にコミュニケーションを取ってくれたことも本人のやる気が削がれなかった一因のように思えました。



学びの経験が繋がってみえてくる

生徒が自分の中に眠っていた「学びのたね」の存在に気付き始めると、自分のまわりに学びが溢れていることに気付く。友達や後輩との何気ない会話、参加したイベント、頼まれごとなど、気が付けば生徒が生徒の伴走役を果たしていた。

EXAMPLE

High School Arc

場面集

18

探究学習

福岡県立
小倉商業高等学校

チームの一員として
責任感や自覚が
生まれている

生徒の声
Student Voice

学びに気付くまで、待つことも必要

伴走者のコツ

学びが繋がっていることに気付き、人との関わりがより深く、より充実していった振り返ってみると「学びのたね」の存在に気付くことで、学ぶことが楽しくなり、人との関わりが深くなった。全ての経験が学びになり、丁寧に関連付けることで、自分がやりたいことの解像度が一気に高まった。

福岡県立小倉商業高等学校 生徒 S.Cさん

伴走者の声
Companions Voice

福岡県立小倉商業高等学校
進路指導主事 主幹教諭
松藤 史紹

「学びのたね」が生徒のやりたいこと、好きなこと、得意なことを丁寧に紡ぎ、気が付きが新たな気付きをもたらし、お互いどう考える、どう考えるというような対話の時間が増えました。また、他者との関わりについても目に見えて増えました。対話の質が上がり、伴走者が問いに窮する場面も出てくるほどでした。変容する瞬間に関わることができた幸運に感謝するとともに、場づくりが大切だとあらためて感じました。



小学校で食育授業を実現したい

掲げたゴールへ一目散という状態であったが、学校から安全管理の観点でストップがかかった生徒たち。ゴール達成だけが成功ではなく「納得するまで教員と話すこと」「制約の中でできることを考える」も意義深いことだと伝え続け、共に考えた。

EXAMPLE

High School Arc

場面集

17

探究学習

沖縄県立
宜野湾高等学校

うまくいかなない時でも
何とかしようと
考え始めている

生徒の声
Student Voice

できることは必ずある、「できる」を一緒に探す

伴走者のコツ

(ダメ元でも)とにかくやる!とにかく話す!

とにかくやってみる!を繰り返し、いろいろな人が関わり始め現実味が湧いてきたときに熱が入った。意見が通らず苦しいときもあったが、「絶対に自分の意見を通したい!」というときも相手の意見を聞きリスペクトすることが大切だと気づき、よりプロジェクトが深まった。

沖縄県立宜野湾高等学校 生徒 R.Nさん/M.Tさん

伴走者の声
Companions Voice

株式会社rokuyou
白石 綾

課題に直面した時にこの状況をどうにかしてあげなくてはと意気込むより、生徒を信じて生徒のそばに居て「今できるベストを一つやって見ない?」と問い続けていると、「思いもしなかったアイディアやアクションが生まれたり、やる気が無かった生徒から相談が来るようになるなど、そうした生徒の変化にグッと心が動かされます。同時に、こうした生徒の変化を目にした先生方が変わっていく姿や、それを機に探究活動について先生方と前向きに対話できるようになっていくことが原動力です。



総合型選抜への焦りを自信に変える

比較対象やライバルがおらず自身の入試対策に自信を持って内心焦っている状況。練習課題を多く提供し、量による自信をつけていく。また複数人で空白が無いように伴走をリレーし、対策の質に対する自信をつけた。

EXAMPLE

High School Arc

場面集

20

進路指導

島根県立
隠岐島前高等学校

形のうえで、
何かできた感があるが、
達成感や成長感がない

生徒の声
Student Voice

伴走はリレーできる

伴走のコツ

焦りはずっとあった

ずっと焦りはあった。他校の受験生はもっと準備しているらしい、周囲からの期待の声……。でも、悩んでいる時間をもったいないと感じた。やることを洗い出し複数の大人に伴走を求めた。最後はこれだけやったことを自信に楽しめた。

島根県立隠岐島前高等学校 生徒 A.Yさん

伴走者の声
Companions Voice

一般財団法人
島前ふるさと魅力化財団
原 周 右

行動・探究実績と学習習慣の双方がある生徒であり、志望校の特徴と志望動機がマッチしていたため総合型選抜の結果自体に不安はありませんでした。それでいて生徒自身が貪欲に真摯に総合型選抜に向き合う姿には心を打たれました。その姿勢に伴走者としてどう応えられるのか不安もありましたが、コーディネーター、教員、公立塾スタッフで見取った生徒情報を共有し「伴走をリレーする」ことで乗り越えられたことは、伴走の在り方として大きな収穫でした。



進学を考える生徒の悩みに寄り添う

志望校を絞る際に、なぜこの大学で学びたいのかを考えるようになった。ここまでの学びを振り返る生徒を笑顔で見守り続けた。やがて書き留めたノート中の「学びのたね」の存在に気づき、満面の笑顔で報告に来てくれた。

EXAMPLE

High School Arc

場面集

19

進路指導

福岡県立
小倉商業高等学校

現状把握、
未来思考ができ
本気で動き出している

生徒の声
Student Voice

ただただ笑顔で見守り続ける

伴走のコツ

見守られていることで安心して自分自身に向き合い、「学びのたね」の存在に気付いた

自分とは不可分な課題を見つけることができた時、「学びのたね」の存在に気付くことができた。これが私の使命なのかなと思うほど気分が高揚したことを覚えている。月並みな表現だが、探究が私を変えたと思う。

福岡県立小倉商業高等学校 生徒 S.Cさん

伴走者の声
Companions Voice

福岡県立小倉商業高等学校
進路指導主事 主幹教諭
松 藤 史 紹

後日談ですが、生徒から笑顔で見守ってくれたことで、安心して自分自身に向き合い、ぼんやりとしていた「学びのたね」がしっかり見えるようになったと聞きました。教員として何か言葉をかけるべきか迷いましたが、あらためて笑顔で見守ることも伴走になったようです。その後の伴走では一段と加速した生徒に引き摺られながら、気が付けば自走していく姿を見て、あらためて探究を通して生徒の成長、可能性を学びました。